

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 4 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370383

研究課題名(和文)理論から作品へ～16世紀イタリアの叙事詩～

研究課題名(英文)From theory to works -Italian epics of 16 century-

研究代表者

天野 恵 (AMANO, Kei)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90175927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：オッターヴァ・リーマによる16世紀のイタリア騎士物語詩は、ルネサンス期から対抗宗教改革期へと移り変わる政治的・文化的状況の変化を背景に、そのテーマと表現方法を大きく変えていくのであるが、言語に関しては14世紀の古典的トスカーナ語への回帰を基本理念とする《ベンボ規範》に忠実であり続けた。

本研究においては、アリオスト作品に大きな影響を及ぼしたベンボ『俗語論』の成立過程を、その手稿まで遡りつつ究明に跡付け、第三巻の精密な解釈を翻訳に定着させるとともに、世紀の後半に入って著しい発展を見せる叙事詩をめぐる文学理論と実作品の関連をタッソの作品において検証した。

研究成果の概要(英文)：Although Italian chivalric or epic poem of the 16th century by Ottava Rima changed its theme and expression method, reflecting dramatic changes in the political and cultural situations from the Renaissance period to the Counter-Reformation period, as for the language, it continued to be faithful to the norm fixed by Pietro Bembo, following his basic idea of returning to the classical Tuscan language of the 14th century, In this research, the process of writing of the so called "Prose della volgar lingua", which had a definitive influence on Ariost's final work, was traced back according to the manuscript, and the precise interpretation of Vol. III was established in the translation in Japanese language with commentary, and the relation between the literary theory, which showed a remarkable development in the second half of the century and the epic work of Tasso was examined with an extreme accuracy.

研究分野：イタリア・ルネサンス文学

 キーワード：イタリア文学 イタリア語 ピエトロ・ベンボ ルネサンス 言語問題 対抗宗教改革 アリオスト
タッソ

1. 研究開始当初の背景

アリオスト研究を続けてきた研究代表者、天野は、『オルランド・フリオーソ』の1532年版(通称C版)への改訂作業にピエトロ・ベンボの『俗語論』の影響が顕著に認められることから、平成22-24年度に受けた基盤研究(C)「ベンボ『俗語論』とイタリア文学語の形成」により、この著作そのものといわゆる《ベンボ規範》の成立過程を明らかにすると同時に、そこに示された具体的な指示を詳しく検証する作業に従事してきた。こうした目的のため、『俗語論』第三巻の和訳も行なったが、これは一般読者を対象とする通常の翻訳とは異なり、難解で錯綜した論述を正確に解釈・表示することにより、俗語文献学を確立した研究者としてのベンボと、文学語の規範を打ち立てようとした、いわば“立法者”たらんとしたベンボという二つの側面を適切に切り分けることを目的とするものであった。ペトルルカやボッカッチョからの豊富な引用例は当然ながらそのままであり、専門研究者のみを対象とした特殊な和訳である。内容の日本語化そのものに大きな意味はなく、原文解釈の精度を向上させるためのものであり、訳注に関しても同様である。こうした調査を通して、ベンボの引用したテキストそのものに含まれる様々の問題点が浮上することとなり、必然的に彼の作成したアルドゥス版ペトルルカ詩集にまつわる疑惑にまで遡って事実関係を究明することとなり、このエディションに付されたあとがき(通称 fascicolo B)が、後に『俗語論』に結実することになる《規範》策定の出発点であったことも確実視されるに至った。

しかし、16世紀イタリアの叙事詩との関連を明らかにするためには、こうした《規範》そのものの成立過程に関する研究と並んで、同時代あるいは後代の作品に《規範》が及ぼした影響のあり方についても具体的な調査が必要であることは言うまでもなく、特に世紀の後半に至ると、文学作品は言語面のみならず創作理論との関わりという側面からも分析を必要とするようになる。このような創作理論と実作品との間の、それまでには見られなかった強い結びつきに関しては、研究分担者、村瀬が、平成23-25年度の基盤研究(C)「16世紀後半～17世紀のイタリアの詩論における「模倣」と「想像」の関係について」により、タッソの文学理論と、ルネサンス期の文学理論のその後の発展を跡付けていた。そこで、16世紀のイタリア文学を専門とする両名が緊密な協力関係を維持することのできる環境が整ったことを機に、世紀の前半から後半までを総合的にカバーするイタリア叙事詩の研究を目指して立ち上げたのが本研究である。

2. 研究の目的

ヨーロッパ文学の歴史においてイタリアが指導的地位についた時期は決して多くない。その数少ない時期のひとつが16世紀である。ロマンス語文学が最初の発展を示すのは周知のように北仏と南仏であり、イタリア文学の歴史は後者の模倣を出発点とするシチリア派に始まる。使用言語の正確な様態さえ現在なお明らかになっていないことから見てもとれるように、未だイタリア文学の揺籃期とも言える活動であったが、ソネットの発明は、詩と音楽の“離婚”など、後のイタリア文学の方向性を規定する重要な基礎がここに築かれ、その流れは中部イタリアの都市国家の支配層に引き継がれる。中でも、経済的・政治的に後発の都市国家でありながら、この時期に急速な発展を見せたフィレンツェ共和国の存在は決定的であった。ダンテ、ペトルルカ、ボッカッチョという三大文人の手により14世紀前半には文学としてのトスカナ語の地位が確立する。しかし、続く15世紀は基本的に人文主義の時代であり、知識層の関心が古典語に集中しがちであったことから、俗語による文学作品が半島全土で爆発的に産み出され始めるのは、活版印刷術の普及によるメディア革命を迎える16世紀初頭を待つこととなった。

16世紀に入ると、叙事詩、抒情詩、散文、喜劇と多彩なジャンルの作品群が一斉に花開き、かつそれらがアルプスを越えて全欧的な影響力を行使し始める。そして、この時代の文学の著しい特色としては、その理論的性格の強さを挙げることができる。理論重視の姿勢はダンテにおいて既に明瞭であったが、人文主義を経験した世代にあっては、文学が確固とした理論によって支えられるべきものであるとする認識がごく一般的なものとなっていた。

15世紀末からまずは文学用俗語のあるべき姿についての「言語問題」と呼ばれる議論が熱心に繰り広げられ、14世紀のトスカナ語を標準とすべしというアルカイズムに則ったベンボの《規範》が確立すると、これはアリオストの創作にも決定的な影響を及ぼした。その後、世紀の後半に入ると、アリストテレス『詩学』の再発見をきっかけとして、今度は創作理論に関する論争の時代を迎える。自らも多数の理論的著作を残したタッソは、当然ながら創作においても理論的傾向の極めて強い詩人であり、作品解釈に当たっては物語構成のみならず詩的技法に関しても常にこのことを念頭に置く必要がある。

従来、ともすれば詩的天才に導かれて読者の感性にダイレクトに訴える詩句を苦もなく紡ぎ出したかに見られがちであったアリオストやタッソであるが、実際には創作の基礎となった理論からのアプローチなくしてその作品の適切な理解に至ることはできない。本研究は、ルネサンス期のイタリア叙事文学を代表するアリオストとタッソという二大詩人の作品を、言語論、ジャンル論、詩論な

ど、創作に大きな影響を及ぼした理論的著作や同時代の知識人たちの議論との関係において捉えなおし、以ってオッターヴァ・リーマを共通形式とする 16 世紀の叙事文学の流れを総合的に俯瞰すると同時に、その文学史的位置づけの明確化を目指したものである。これら二人の詩人は、それぞれ世紀の前半と後半のイタリア語による叙事詩を代表する存在であるが、これまで両詩人を独立に研究対象としてきた二人の研究者が、各々の研究方法とその成果に対し、相互に高精度の文献学的分析を踏まえた批判的検討を加えることにより、それらを従来とは異なる角度からの視線にさらしつつ、ひとつの連続した流れとしてイタリア文学史の中に位置づけ、かつ文化的・社会的背景をも視野に入れて科学的に記述することを目的とするものである。

3. 研究の方法

研究対象はオッターヴァ・リーマによる 16 世紀イタリアの叙事文学であり、明らかにしたいのは、このジャンルの主要作品に言語、技法、構成等のあり方の規範を提供した理論の形成過程と、その理論が実作品に反映されるに至ったプロセス、および背景となった文化的・社会的コンテクストとの関係である。要となるのは調査資料の作成であり、これらの資料に盛り込まれる情報の深度と精度が成否の決定要件となる。また、優れた資料が作成できれば、それは本研究のみならず 16 世紀のイタリア文学に関わる今後の様々な個別研究に役立てることができるため、そのクオリティの水準は高い重要性を有する。本研究の場合、具体的な核となるのは、ベンボの『俗語論』がアリオストに及ぼした言語的・技法的影響の検証と、続く時代に浮上した創作理論がタッツォの作品構成および enjambement をはじめとする重要な詩的技法の開発とどのように関係しているのかを詳細に検討する作業である。

複数の筋書きの同時進行 entrelacement を特徴とする騎士物語詩が言語的・技法的洗練を極めてアリオストにより完成に至り、やがてその後、知識人たちの関心が詩論や創作理論へと移行するにつれて、これを踏まえたタッツォが英雄詩という概念を作品化するに至るのであるが、そのプロセスをあくまでも科学的・実証的に明らかにするためには、言語論ならびに創作理論の著作と、叙事詩の実作品のいずれに関しても、まず正確なテキストを得ることが必須となる。とりわけ、ベンボの『俗語論』には 1525 年に刊行された初版本 (Tacuino 版) および著者の没後 1549 年に刊行された決定版 (Torrentino 版) を含む計三種の刊本に加えて、1520 年代に作られたと推定される手稿 (Vaticano Latino 3210) が残されており、従ってこれらの間の異同を正確に把握することが重要課題となる。

この著作の執筆・改訂の過程は、アリオスト

による『オルランド・フリオーソ』の創作・改変作業と時期的に並行していたことから、これは強い関心の的とならざるを得ない問題であるが、これ以前にも、文献学者としての活動から《規範》制定へというベンボ自身の意識の変化を反映する異同である可能性が高いことから、この推移をたどることによって初めて著作の正確な解釈が可能になる場合が少なくない。

そこで、この研究のための資料としては、ヴァチカンの手稿の写真および三種の刊本を揃えた上で、それらの間の異同を文字情報化したものを用意することになる。手稿には当然ながら加筆・訂正の跡が残されており、それらは特に第三巻に多いが、幸い、初版のテキストをベースに、これらの異同を克明に記録したエディションが Claudio Vela によって作成・刊行されているので、初版に至るまでの異同はこれを参照しながらフォントの色を適切に使い分けることによって、デジタル・テキストを作成することが可能である。

こうして整備されたテキストに、さらに決定版を含む残りの二種の刊本の異同情報を同様の手法で盛り込んだものを作成することになる。

特に重要なのは第三巻である。量的に全体の半分を占めるこの巻は、そもそも当初の執筆が他の二巻よりも遅く、これらとは時期的に断絶していると考えられるが、それに加えて、《規範》を具体的に示すためのダンテ、ペトルルカ、ボッカッチョらの作品からの引用例が非常に多く、しかも修正箇所も多岐にわたる。従って、この第三巻の異同情報を手稿上の修正を含めて漏れなく拾い上げ、かつ、全体像を視覚的に把握しやすいよう表示することができるかどうか研究計画全体の成否を左右することになる。

これと並んで必要なのは、こうした《規範》が実作品の創作に当たってどのように考慮され、採り入れられていったのかを明らかにするための、いまひとつの資料の作成である。データの宝庫となることが予想されるものの一つは、Frammenti autografi と通称されるアリオストの自筆ノートである。『オルランド・フリオーソ』C 版に付加されたエピソードの様々な創作段階を含むこのノートは、すでに一世紀近く前に Debenedetti による活字化がなされており、また、各エピソードの創作年代に関する天野の研究があることから、こうした情報を上記のベンボ『俗語論』の形成過程に照応させることにより、詩人が《規範》を受け入れて行った過程をある程度までたどることができる可能性が高い。

ただし、こちらは自筆ノートの各分冊の様態や創作過程の中に占める位置が様々であり、分冊によっては加筆・訂正の跡があまりにも錯綜していることから、その情報をすべて盛り込んだデジタル・テキストを一挙にまとめるのは困難であり、分冊ごとに異なる対応を迫られることになる。

以上が世紀の前半に進行した言語面における理論の形成と実作品への反映の実証的検証の核となる部分である。イタリアの文学語は、これ以後《規範》による固定化が進み、前世紀末から盛んに戦わされた、いわゆる「言語問題」の論争は終息する。

一方、世紀の後半に入ると、これに替わって活発となるのが創作理論に関わる議論である。きっかけの一つはアリストテレス『詩学』の再発見であったが、こちらの議論もまた同時代の主要な実作品のあり方に大きな影響を及ぼした。

複数のストーリーが絡み合いながら進行する *entrelacement* を構成上の特徴とする騎士物語詩が言語的・技法的洗練を極めて、『オルランド・フリオーソ』においてその完成形態を示した後、知識人たちの関心は、こうして詩論やジャンルに関する議論へと移行し、オッターヴァ・リーマを共通形式とする 16 世紀イタリアの騎士道文学は、物語詩という開かれたスタイルから厳格な形式美を追求する叙事詩へと大きく舵を切る。創作理論として「英雄詩」の概念を明確化し、その上でこれを作品化していくタッソの文学は、こうした流れの中に位置づけられてこそ正しく理解され得る。

文学史上のこうした変化そのものは以前よりいわば定説となっており、本研究もこれに異論を唱えようとするものではない。目的とするのは、理論・作品の両方において厳密なテキスト解釈に基づく定量的データを抽出し、これをベースに客観的・実証的な作品解釈を可能ならしめるとともに、様々な要素をパラメーターとする数多くの個別研究に道を開くべく有用なデータを高精度で獲得することである。

主要な研究対象となる理論的著作は言うまでもなくタッソ自身の著したものであるが、彼がパトロンたちと交わした書簡類もこれに劣らず重要であり、またタッソに近い立場のイアソン・デ・ノーレスや、逆にタッソが批判したヤコポ・マツォーニといった同時代の他の理論家たちの著書も調査対象として逸することができない。

こうした創作理論の実作品への反映に関しては、研究分担者の村瀬がこれまでに実施してきたアンジャンプマンの使用に関する調査のほかに、直接話法の導入方法を精査することになる。具体的には、叙述の地の詩句から直接話法で書かれた部分への移行に関して、その頻度や直接話法部分の開始と終了とがスタンツァ内部において占める位置などの定量的データを集積して、これを分析することにより直接話法に担わされた詩的效果等、技法上の特徴を分析する。

4. 研究成果

ベンボ『俗語論』に関しては、初版 (Tacuino 版、1525) 第二版 (Marcolini 版、1538) お

よび決定版たる第三版 (Torrentino 版、1549) のすべてについて、研究計画初年度に良好なコンディションの刊本 (オリジナル) の入手に成功し、これらの全頁を撮影して必要な情報を書き込んだデジタル画像を作製した。

また、初版の元となったベンボの自筆写本 Vaticano Latino 3210 については既にヴァティカン図書館よりマイクロ画像 (モノクロ) を入手してあったが、最終年度にはこれに加えて、NTT の協力でヴァティカン図書館のサイトにカラー画像が掲載されたので、これをも参照した。ただし、こちらは残念ながら精度に不満があり、両者を並行して参照する必要があった。

次に、こうして揃えたデジタル画像をベース資料として、手稿および各エディションの異同をフォントの色分けにより示したテキストを作成した。すなわち、手稿の第一草稿のテキストをベースとして、これを黒のフォントで表わし、1525 年の初版においてここから削られた部分を茶色にし、このうち手稿上で既に削除の指示がなされていた部分は、下線を加えてこれを示した。また、第一草稿にはなく、手稿紙葉の余白あるいは別紙等に加筆されて初めて現れる部分は緑のフォントとし、このうち、一旦書き入れた後に削除の指示がある部分は下線をもって示した。なお、特に指示はないもの実際には初版に見出されない部分 (印刷段階において削除されたと推測される) は破線の下線とした。一方、手稿には見出されないながら、初版に書き加えられている部分はブルーのフォントとし、同様に第二版で初めて付加された部分を紫、そして決定版である 1549 年の Torrentino 版での付加部分を赤のフォントで示した。また、逆に削除された部分はアンダーラインで表現した。

三種の刊本に関しては、これらの提示するテキストがそれぞれ一本にまとめられるのであるが、手稿においては、数多く残されている加筆・訂正痕が時に複雑を極め、上記の方法のみを以てしては十分に表現できない場合が少なくなく、適宜全文を併記する等、別の方法を講じて、時系列でそれらを追えるよう工夫した。また、言うまでもなく、こうして作成したテキストには詳細な註を施し、また、和訳には引用作品の出典を青のフォントで記載した上、註にはそれらの異同を記した。

こうした作業の段階で浮上したのは、これらの引用作品に関しては、ベンボの参照したテキストを特定する必要性であった。ペトルルカとボッカッチョについては既にかなり詳細な研究があり、ヴィッラーニやダンテに関してもおよそのことは判明しているが、それら原テキストの異同がベンボの主張に直接かわるケースは、これを抽出して考察を加える必要がある。その上で、彼が参照したテキストを忠実に引用しているか否か、またそうでない場合には、それが故意によるものか

否かが、《規範》意識の有無を判断するに当たって問題となるからである。

これらの作業は予想を超える困難を伴い、結果、計画通りに3年間で研究を終了させることはできなかった。こうした困難は研究計画の二年目において既に明らかになっていたのであるが、その頃には、イタリアにおいても本計画に重大な影響を及ぼさずにはおかない事件が起きていた。これに伴って、単なる時間的な遅れとは別に、いずれにせよ当初の計画に沿う形で研究を完成させるのは不可能であることが判明した。

その事件とは、ベンボの所有していた初版の刊本に彼自身が書き込みを施したものが、ペルージャ大学のカルロ・プルゾーニ教授らの手によって発見されたことである。もともと1549年の『俗語論』第三版テキストが、第二版ではなく初版の刊本をベースとして、これに加筆・訂正の施されたものであったことは以前より確実視されており、本研究計画の作業中にもそのことは随所で確認することができたのであるが、この第三版の元となった直接資料についてはこれまで知られることがなかった。

言うまでもなく、このような重要資料が発見されたことは、本研究の目指すところにとって決定的な意味を持つ。まずは上に述べたような『俗語論』の基礎テキスト整備に当たって赤のフォントで表記した部分が根本的な見直しを迫られることになる。

アリオストが『オルランド・フリオーソ』C版は1532年に刊行されており、従ってそのための改訂に当たって参照されたのは『俗語論』初版であることから、アリオストとの関係においては今回の発見に影響される要素は無いと考えられるものの、ベンボの文献学者から《規範》制定者へという意識の変化を追跡するに当たっては、このたび発見された初版の刊本への書き込みが決定的な意味を持つ。

この発見によって光の当てられる可能性の高いいまひとつの重要な点は、『俗語論』第三版の改訂部分のうち、本当にベンボ自身の指示に基づいているのかどうか疑われる個所に関する事実関係である。

16世紀のイタリア半島は周知のとおり政治的・社会的・思想的に激動の時代を迎えており、本研究が対象とする理論的著作や議論、文学作品などは、すべて当時の社会情勢の中に置いて眺められるべきものである。言語問題はすなわち政治問題に他ならず、イタリア戦争や「外国支配」に対する知識層の憂慮と、関係者のそれぞれが所属する都市国家あるいはローマ教会などの組織の利害や命運が、理論的主張や作品のあり方に密接に絡み合っている。

ベンボがヴェネツィア共和国の支配層に属する人間であると同時に、教皇秘書官をも務めた高位聖職者であったという事実を、『俗語論』第三版が彼の没後にフィレンツェにおい

て、しかもトスカーナ大公コジモ1世と関係の深い知識人ベネデット・ヴァルキの手によって出版されていることと考え合わせると、『規範』のあり方をめぐる議論にはいくつかの疑惑が浮かび上がってくる。すなわち、一部の記述は、ベンボの意思とは無関係に、ヴァルキら当時のトスカーナ人によって改変されたものである可能性が考えられるのである。上記の刊本へのベンボ自身による書き込み、あるいは、場合によってはその“欠如”自体がこれらの疑惑を解く鍵になるものと期待される。

創作理論に関しては、社会情勢との関連が言語関係に比べても一層顕著であり、従ってトレント公会議以後の対抗宗教改革期のただなかであったことを考慮に入れることなしに適切な解釈を求めることは不可能であるが、そうした時代への推移を客観的に観察するためにも、この新資料を精査することは極めて重要である。

こうしたイタリアにおける研究の進展に歩調を合わせるべく、本研究のメンバーは、当初の計画を延長する形で、村瀬を研究代表者とする新計画を立てて科研費を申請し、幸い、この計画は平成29-31年度の基盤研究(C)「ルネサンス期イタリアにおける言語規範と文学理論の深層」として採択された。この新研究計画においては、イタリアから上記の新資料の発見者であるカルロ・プルゾーニ教授を招いて協力を仰ぐ予定である4。

なお、同教授のチームは、1501年のアルドゥス版ペトルルカ詩集の刊本にやはりベンボ自身が書き込みをしたものについても分析を進めていることから、かつて天野が平成22-24年度の基盤研究(C)「ベンボ『俗語論』とイタリア文学語の形成」において行なった、同書のベンボによるテキスト校訂とペトルルカの自筆写本 Vaticano Latino 3195 との関係にまつわる諸問題にも立ち返って、新たな情報による一層高精度の研究を遂行することができるものと期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

村瀬有司、『エルサレム解放』の直接話法数量データに基づく比較検証、京都大学文学部研究紀要、査読無、56巻、2017、59-84

村瀬有司、トルクアート・タツソのインブレーザ論における像の問題、京都大学文学部研究紀要、査読無、54巻、2015、141-165

[学会発表](計 11件)

村瀬有司、8行詩節と直接話法『エルサレム解放』における発話の長さとの配置につい

て、関西イタリア学研究会第 27 回例会、2016 年 12 月 24 日、京都大学（京都市）

天野 恵、ベンボ『俗語論』の亀裂 文献学と《規範》の狭間、ルネサンス研究会、2016 年 12 月 10 日、同志社大学（京都市）

村瀬有司、『エルサレム解放』における分離型の直接話法について、イタリア学会第 64 回大会、2016 年 10 月 29 日、京都外国語大学（京都市）

天野 恵、芸術作品としての研究論文、関西イタリア学研究会第 21 回例会、2016 年 4 月 24 日、京都大学（京都市）

天野 恵、イタリア文学の流れとアリオスト 1) 都市国家の世界、2) ヒューマニズムと騎士物語詩、3) 『フリオーソ』の基本的性格、東京音楽大学招待講演、2016 年 3 月 28 日、東京音楽大学（東京都）

村瀬有司、牧歌劇の伝統と『アミンタ』、『エルサレム解放』における直接話法について、タッソの創作理論について、東京音楽大学招待講演、2015 年 3 月 11 日、東京音楽大学（東京都）

村瀬有司、タッソのインプレーザ論における人体のイメージの問題について、ルネサンス研究会、2014 年 12 月 13 日、同志社大学（京都市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天野 恵 (AMANO, Kei)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号： 9 0 1 7 5 9 2 7

(2) 研究分担者

村瀬有司 (MURASE, Yuji)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号： 1 0 3 2 4 8 7 3

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

()